

平成29年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月20日実施)	総合評価 (3月28日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が将来にわたって主体的に学び続ける意欲や探究心を高め、自らを伸ばさせることができるよう、教育課程編成や授業改善に取り組む。 学校行事や生徒会活動等を充実させ、自立と社会参加に必要な力の育成を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い学習ニーズに対応する多様な柔軟なIT講座の改革に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成30年度の通信制運営総合情報システムの更新に向け県教委と連携しながらどんな生徒でも履修しやすいIT講座の環境を整える準備をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> スマートフォンやタブレットでも使うことができるようにして、学び直しや進学に向けた発展的な学習など、どんな生徒にもより充実した学習内容を提供できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> システム更新チームを中心に平成30年度実施に向け既存システムの改良、改善を行った。 新システムに搭載する新たな動画コンテンツを各教科で作成した。マルチプラットフォーム化を進め、今まで不可能であったスマートフォンからのシステムアクセスを可能にした。 	<ul style="list-style-type: none"> システムの更新により、発展的な学習が出来るようになるが、運用面で問題点が出た場合にすみやかな対応ができるかが課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々なIT環境の家庭に対応できるようなシステムを構築したことを評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> IT講座を利用する生徒はもちろん、平日や日曜講座を受講している生徒にも学習進度や出席できなかったスクーリングの動画コンテンツを手軽に閲覧できるシステムを構築できた。新システムスタートにより、運用面で問題点が出た場合のすみやかな対応が課題となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な学習ニーズに応える履修環境を整えることができた。今後は、新システムを活用し、学習意欲の高い生徒、非活動生や学習が進まない生徒にどのよう単位修得をさせるかに単位が減少している中、学務グループなどが中心となり、学校全体で取り組んでいく必要がある。
2 生徒指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> 多様化する生徒の実態を踏まえ、学びたい生徒が安心して学ぶことができる環境を作る。 生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を適宜周知徹底することで、学びの活性化や安心な学校づくりを目指す。 多様化する生徒について、実態の的確な把握及び分析により、合理的配慮の理念に基づく効果的な支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> インフォメーションシステムや「横浜修悠館通信」、ホームページ等を活用して情報を適切に発信することで、特別指導案件の未然防止を行う。 SC、SSW、精神科校医による相談体制、保護者教育相談会、個人面談月間等を活用することで相談体制の充実を図り、TRY教室、架け橋教室、悠ルーム等の利用を促すことにより生徒の学習活動が、順調に行えるよう支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別指導の延べ件数が昨年度より減っているか。 TRY教室、悠ルーム等、延べ750回以上の利用。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別指導の件数は前年比64%(14件/24人→9件/11人)。未然防止指導の効果が上昇。 TRY教室利用者が前年比約130名増。学習支援面での充実が目立った。TRY教室、悠ルーム等の利用状況についても、目標の750回を上回る成果。 健康診断受診率向上に取り組み、検診対象者数に対する受診者数の割合で、約10ポイントの増加を達成。 	<ul style="list-style-type: none"> 件数が減少したが、重い事案もあるため、未然防止の取組範囲を広げる必要がある。 SSWの利用方法・利用意義の周知を図り、SSWの一層の活用を行う。 TRY教室、悠ルーム等の利用案内・利用状況を周知し、学校における生徒の居場所作りや学習活動のいっそうの活性化を行う。 生徒の健康の維持・増進のため、健康診断の実施形態等について、引き続き創意工夫を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域にいてずっと見てきたが教員の指導により、以前と比べ落ち着いた学校になった。 子育てに関する役割が薄れる家庭が多い中、TRY教室、修悠館サテライトの役割は大きい。 きめ細かい支援を行っていることは評価できる。生徒が、自発的に支援を受けに行きたくなるようアピールして欲しい。 生徒・保護者が動くのを待つのではなく、通信紙に色をつける工夫をし、学校が保護者を巻き込んで活動を活性化させてはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 未然防止の効果は見られた。ただ、Web上のやりとりや、生徒が抱える問題に起因するようなトラブルに関しては発見、未然防止が難しい現状もある。 様々な手段による相談体制の充実を図り、TRY教室、架け橋教室、悠ルーム等の利用を促すことにより生徒の学習活動が、順調に行えた。ただ、中には単独では支援手段にスムーズにつながらない生徒もいる。また、いっそうの支援手段の利用促進に向けて、PR方法、PR機会の増加について再検討を要する。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援データベースなどを活用しながら教員間の情報共有を密にすること、日頃から生徒への声かけや保護者との連携により生徒の背景をつかむことにより、効果的な未然防止策を用いる。 各種支援について、PR方法やPR回数などの再検討が求められている。また、何らかの事情があり通常の利用形態では不十分な場合については、利用希望者との情報交換や柔軟な調整が大切である。
3 進路指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が社会的・職業的自立に向けたキャリア発達を意欲できる就労支援・進学支援の充実を図る。 インクルーシブ教育を推進し、多様な生徒の自らを伸ばさせる可能性を引き出す支援体制の構築を図るとともに、生徒一人ひとりに、 	<ul style="list-style-type: none"> 職業観・勤労観の育成を図るとともに、生徒のニーズに対応した進路指導を実現する。 生徒の自立と社会参加を目標に、外部機関との連携を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任やキャリアアドバイザーと連携を取りながら、保護者も含めたキャリアガイダンスルームの活用を促し、生徒個々のニーズに応じた進路相談の充実を図る。 修悠館サテライトの広報に力を入れ、生徒の継続的利用を促す。 特別な教育的ニーズを有する生徒の進路実現のため、個別の支援計画の活用 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業予定者のうちキャリアガイダンスルーム利用者の割合が増加したか。 卒業予定者以外の生徒のキャリアガイダンスルーム利用者の割合が増加したか。 一社あるいは一校でも受験した生徒が全員内定あるいは合格することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業予定者のキャリアガイダンスルームA利用率は前年比6.2ポイント増、同Bは4.9ポイント増。(2月末) 卒業予定者以外のキャリアガイダンスルームA利用率は前年比0.2ポイント増、同Bは10.4ポイント増。(同) 就職受験者13名中、内定者10 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアガイダンスルームについて、HRや進路説明会での呼びかけ、「修悠館通信」「進路通信」、インフォメーションシステム、HP等を通じて周知し、利用を促す。 就職活動開始前に三者面談を行うとともに、きめ細かいカウンセリングの手順を工夫する。 修悠館サテライト利用に関して、利用生徒の声をインフォメーションシステムで紹介し、自発的な利用を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が支援策を自発的に利用ができるようになるには、スクーリングやHRでの一人ひとりの生徒の状況把握が不可欠である。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種の呼びかけによって、キャリアガイダンスルームA・Bの利用率を増加させることができた。保護者の利用についても周知を行うことができた。さらに生徒・保護者の利用を促していく必要がある。 修悠館サテライト利用によって状況が改善したり事例から職員間でサテライトの評価が高まったことにより、相談件数が273 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアガイダンスルームの利用率は増したが、就職内定者数は減った。生徒の意識や適性を早い段階で把握し、本校が持つ様々な支援チャンネルへつなぐとともに、卒業後の継続的支援の場を提示する必要もある。キャリアガイダンスルームA・Bともに、呼びかけを工夫して利用を促していく必要がある。

		りがお互いを認め合う人権意識の涵養に努める。		により、就労支援、社会参加への支援をいっそう充実させる。	・修悠館サテライトの、のべ相談件数が昨年度並みの200件以上。 ・個別の支援計画を作成した生徒の就労、または社会参加95%以上。	名。縁故就職2名。(同) ・修悠館サテライトのべ相談件数257件(同)。 ・個別の支援計画に基づいて関係機関との連携やインターンシップ等を実施。個別の支援計画を作成した生徒の卒業後の進路の実現・支援機関へのつなぎは100%。	・近年、就労支援サービスや就労を取り巻く各種制度も充実しつつある中で、生徒の進路も多様化している。引き続き、生徒の実態とニーズに応じ、適切な情報提供を行うとともに、いっそうの支援の充実に努めたい。		件、1日平均3.4件(年度末)と増加した。支援が必要な生徒に利用の機会が行き渡るようキャンセル対策を講じる必要がある。 ・個別の支援計画を作成した生徒についての就労、社会参加への支援は、インターンシップが前年度より1.5倍以上になるなど順調に推移した。潜在的なニーズのある生徒へのPRが今後の強化すべき課題である。	・各種支援と連携していることから、修悠館サテライトの活用方法が多様になってきている。更なる有効活用に向けて各種支援が円滑に連携できるよう配慮する。 ・個別の支援計画を作成した就労または、社会参加への支援について、希望している生徒及び保護者への周知の努力をいっそう強化していく。
4	地域等との協働	・地域や外部機関との連携・協働を推進し、地域を信頼するとともに、地域に信頼される学校づくりを進める。	・施設訪問・地域貢献活動や地域の祭り等の行事への参加を通じて地域との連携を深める。							
5	学校管理 学校運営	・生徒が将来にわたって自らを伸ばさせる可能性を最大限に引き出すための、教員の能力向上や意識改革を図る。 ・すべての職員が教育環境の変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む学校文化を形成する。	・文科省委託「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の経過を共有しつつ、成果の取りまとめに取り組む。 ・日常生活と同様に、学びにおいても子どもたちがICTを手段として活用していくことを目指して、教育の情報化を加速する。	・外部資源と連携し、専門相談員が常駐する相談センター、またスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、キャリアアドバイザー等、校内外の支援資源との連携を推進して各種相談・支援の情報を共有し、重層的支援を図る。また、生徒への学習支援を外部機関との連携を通して展開し、生徒一人ひとりの学習にとってより良い効果が得られるシステムを構築する。 ・スクーリング(授業)におけるICT活用について、教員へのサポートを推進する。 ・生徒が本校のeラーニングシステムを有効に活用した学びを展開できるよう、サポートを行う。	・外部資源と連携した重層的支援システムのモデルを構築できたか。 ・外部資源との連携を受けた生徒が進路実現できたか。 ・校内の先進的な取り組みを、校内外で共有できたか。 ・普通教室でのスクーリングにおいて、日常的にICTの活用が図られたか。 ・eラーニングシステムを活用した講座の単位修得率が向上したか。 ・次期eラーニングシステム(30年度～)の構築が支障なく行えたか。	・文科省委託事業の成果として、外部資源と連携した重層的支援システムのモデルを構築した。 ・支援システムを活用した生徒が3名志望大学に合格した。 ・全国高等学校通信制教育研究会での発表を始め、16件の視察受入を通して校外に、生徒理解や若者支援、他県における先進事例の校内研修、保護者セミナーを通して校内で成果を共有した。 ・スクーリングでのICT活用を日常的に実施。 ・理科においてeラーニングシステムでの修得率を実施した全ての科目において向上させ、他の学習形態よりも高い修得率を実現した。 ・次期eラーニングシステム(30年度～)の構築を行った。	・委託事業による研究終了後も、重層的な支援を教育活動へ落とし込み、継続させていく。 ・引き続き、学習意欲の高い生徒を育てる支援ICTを活用して行う。 ・引き続き先進的な取り組みを発信できるよう、学校全体で努力を続ける。 ・学校独自で整備したICT機器の維持、管理を適切に行う。 ・新eラーニングシステムを適切に活用し、いっそうの教育効果をあげる。	・通信というとIT環境の整備に目が行きがちだが、社会で生きていくために、生徒が対人関係を結ぶコミュニケーションスキルを身につけられるよう、ソーシャルワーキングトレーニングを取り入れたスクーリングを長期的視野で試みてほしい。 ・外部資源と連携した重層的支援システムのモデルを構築することができ、さまざまな状況の生徒の進路実現につながった。 ・また、本校での先進的な取り組みを、全国に発信し、この国の高等学校通信教育充実に向けて取り組む多くの方々や情報共有できた。校内においても全職員が情報を共有し、保護者との連携も行った。 ・教育の情報化について、スクーリングにおいて日常的にICTの活用が図られるようになった。eラーニングシステムでの遠隔教育についても一定の成果を上げることができた。 ・課題として、通信教育で学ぶ生徒がコミュニケーションスキルを向上させる指導法の開発、新eラーニングシステムを活用した「学校に行けない子どもたち」へのサポートの充実がある。	・研究開発した重層的な支援システムを、日常の教育活動で効果的に機能するよう引き続き研究を続けて、平成30年3月告示の次期学習指導要領による教育課程の編成に生かしていくとともに、新たな課題の解決に向けた研究開発にも挑戦し、多様な生徒への一層のサポートに取り組んでいきたい。	